日本建築学会中国支部研究報告集 第34巻
平成23年3月

民家を活用した通所介護施設「えんがわ」の使われ方

ー山口県阿武町における高齢者福祉施設のネットワーク構築に関する研究　その３ー

正会員　○三島　幸子*
正会員　中園　眞人**
正会員　山本　幸子***

地域福祉施設　高齢者デイサービス　既存民家
改修　使われ方

1. はじめに

本報では広域基幹施設と利用圏を分担する、民家を活用した「えんがわ」を対象に、使われ方調査結果を元に活動プログラムと活動場面の分析を行い、民家型小規模介護施設としての使われ方の特徴を明らかにする。

調査内容は平面図の作成、活動場面記録調査である。平面図は実測調査を行い、家具配置も記録している。活動場面記録調査は平成 21 年 12 月 9 日―12 月 13 日の 5 日間、施設内を終日（午前 9 時から午後 5 時）5 分間間隔で利用者及びスタッフの行動観察を行い、行為内容及び行為場所を平面図上に記録した。図 1 に平面図を示す。

2. 施設の空間構成

6 畳の和室が続き間 4 室は既存のまま利用し、その内の南側の 2 部屋は機能訓練室 1, 2 で、間のふすまを取り外して利用者の居間とし、食事や体操、レクレーションの場ともなる。奥の和室は機能訓練室 3、4 で、ベッドが置かれ介護度の高い利用者がいる場合や午睡のときに使用している。また、機能訓練室４は普段はほとんど使われていないため一部物置としても使用されている。

台所は食事サービスとして利用するために床の張り替えをしている。また、スタッフの休憩場所としても使用されている。トイレはもともと 2 個所あり、両方水洗化し使用することで混雑を解消している。

相談室はスタッフの所持品置き場と事務スペースを兼ねている。一番奥の部屋と 2 階は物置になっている。

また、土間にプレイルームを、玄関にスロープを新設している。

3. １日の生活プログラム

調査期間 5 日間の 1 日の生活プログラムを図２に示す。1 日の生活プログラムは大きく、(1)8:30～9:30：送迎(迎え)(2)9:00～10:00：バイタルチェック・お茶(3)10:00～12:00：入浴１(4)10:30～11:00：体操(5)12:00～12:40：昼食(6)13:00～14:00：午睡(7)14:00～15:00：入浴２(8)14:30～15:30：レクリエーション(9)15:30～16:00：おやつ(10)16:00～：送迎(送り)に区分される。

利用者は全てのプログラムを機能訓練室 1,2 で行っている。機能訓練室 3 は午睡のときに使用され、機能訓練

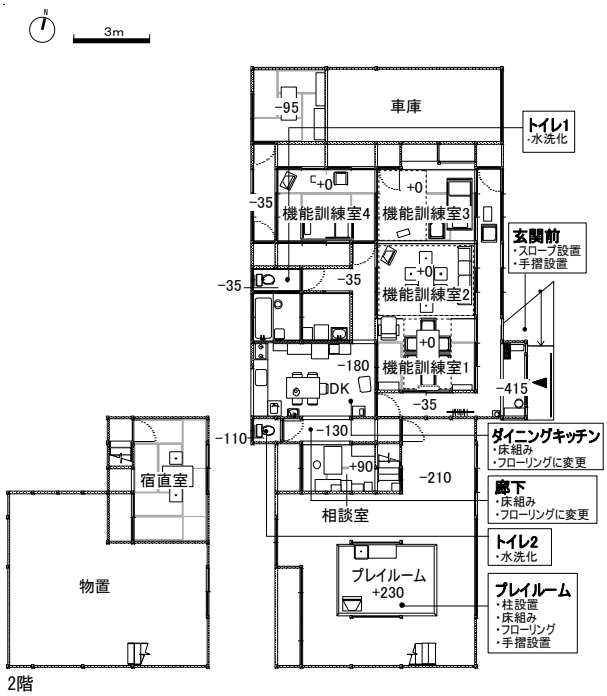

図１　平面図

写真１　「えんがわ」

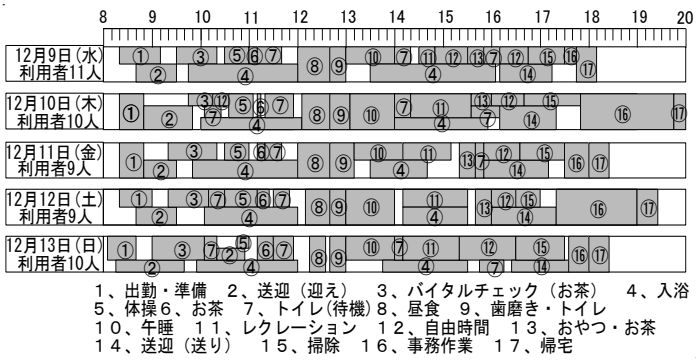

図２　プログラム

The Usage of the Renovation of the Traditional Wooden House for the Welfare Facility '*ENGAWA*'
Network Construction of Welfare Facilities for Old People in Abu Town Yamaguchi Prefecture (Part 3)

MISHIMA Sachiko, NAKAZONO Mahito, YAMAMOTO Sachiko

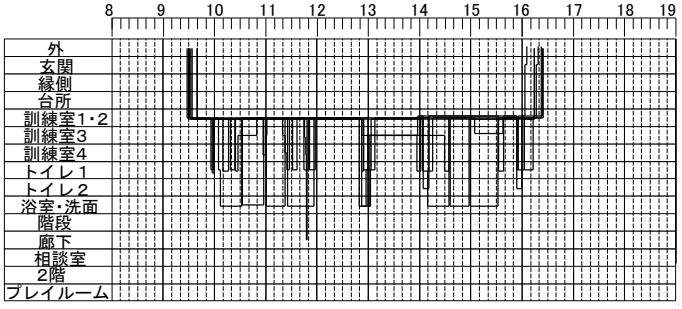

図３　利用者の居場所（12 月 12 日）

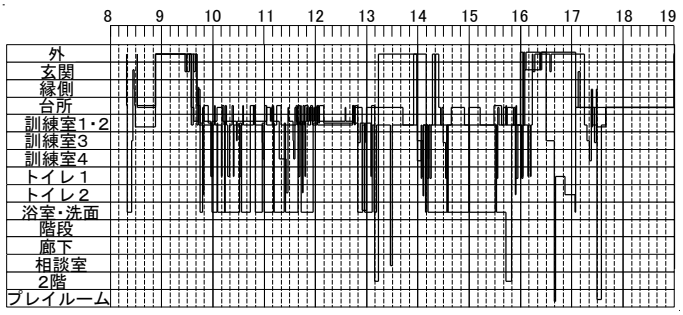

図４　スタッフの居場所（12 月 12 日）

室４は必要なものを置くスペースとして使用されている。介護度の高い人や、午睡時にベッドで寝たい人が 2 人いた場合のみ機能訓練室 4 のベッドが使用されている。プレイルームは今回の調査では１度も使われなかった。

利用者の居場所の一例を図 3 に示すが、利用者は 1 日のほとんどを機能訓練室で過ごし、トイレや浴室以外の居室移動はほぼなく、機能訓練室 1，2 が 1 日の生活拠点となっている。

スタッフの居場所の一例を図４に示すが、台所がスタッフの休憩場所になっていることもあるが、お茶の準備や昼食の準備で台所と機能訓練室 1，2 を行ったり来たりしている。入浴担当のスタッフは午前と午後で分かれており、浴室と機能訓練室 1，2 を往復している。機能訓練室 4 は必要なものを置くスペースにもなっているため、机やホットカーペットなど必要に応じて取りに行ったりしている。

４．利用者の行動パターン

１）送迎（迎え）、バイタルチェック

スタッフは全員送迎に出ていき、玄関に大きな段差があるため、到着すると１人ずつスタッフが介助しながら利用者の好きな席に座らせている。その後スタッフはお茶の準備をして利用者に渡している。

バイタルチェックは 1 人のスタッフが到着した人から順番に行っている。利用者はその間他の利用者と話をしたり、お茶を飲んだりしてのんびり過ごしている。

２）入浴 1、自由時間 1

入浴担当のスタッフが浴室の準備をすると、1 人ずつ

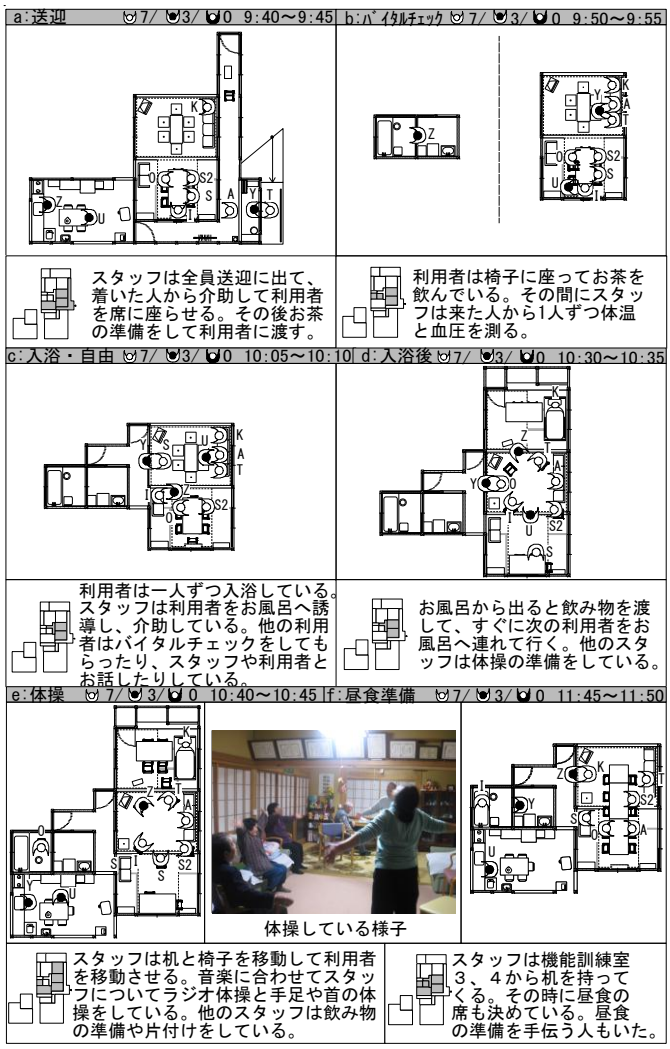

図５　利用者の居場所と行為（午前）

利用者を浴室へ誘導する。浴室は既存のものをそのまま使っているため、段差も大きく、スタッフの介助が必要になっている。その間、他の利用者はバイタルチェックをしたりゆっくりしたりして過ごしている。利用者がお風呂から出て機能訓練室に移動すると、すぐに次の利用者を浴室へ誘導する。お風呂から出た利用者は他のスタッフに飲み物をもらっている。その間、利用者はスタッフや利用者とお話ししたりしてそれぞれ自由に過ごしている。

３）体操

体操の時間になるとスタッフは机と椅子を動かして、「体操をしましょう」と利用者に呼びかけて始める。1 人のスタッフが音楽を流しラジオ体操をする。ラジオ体操が終わると、1 度休憩し、そのあと冊子をもとにスタッフが別の音楽を流しながら、手足や首の軽い体操をしている。その間、別のスタッフは飲み物の片づけや準備をしている。体操が終わると、スタッフは机と椅子をもとの位置に戻す。

４）昼食

図６　利用者の居場所と行為（午後）

台所では 1 人のボランティアとスタッフが昼食を作っている。昼食の時間が近づくとスタッフは機能訓練室３，４の部屋から机と椅子を運び昼食の準備を始める。机にランチョンマットやお箸を並べる手伝いをしている利用者もいる。他の利用者はソファに座ってゆっくりしている。２人のスタッフはいすを運びながら今日の昼食の席順を相談している。椅子は 3 種類あり利用者によって使う種類が大体決まっているため、スタッフは席順を考えながら椅子の配置をしている。昼食の準備が出来ると、「いただきます」を合図に食べ始める。スタッフは利用者の間に座って一緒に同じものを食べている。

５）午睡

利用者全員が食べ終わるとスタッフは片づけを始める。食器を片づけ、利用者をソファに座らせると机を元の場所へ戻す。1 人のスタッフは順番に利用者を歯磨きへ誘導している。その後、機能訓練室４からホットカーペットと布団を出し、すぐに午睡の準備を始める。準備が出来るとスタッフは利用者に「寝ましょう」と呼びかけて、寝かせる。利用者が全員寝始めるとスタッフは機能訓練室 2，3 の部屋の電気を消す。その間スタッフは台所で食器の片づけをしたり、機能訓練室 1 と相談室で分かれて事務作業をしたり、休憩したりしている。

６）入浴 2、自由時間 2

14 時になるとスタッフは電気をつけ、利用者に「起きましょう」と呼びかけ利用者を起こす。スタッフは入浴する利用者を浴室へ誘導し始める。他の利用者はソファに座らせて、スタッフはすぐにホットカーペットと布団を片づける。まだ寝たがっている利用者がいる場合は、機能訓練室 3 で寝させている。

７）レクリエーション

スタッフは時間になると機能訓練室 1 の机と椅子を端に寄せて、利用者に呼びかけてレクリエーションを始める。1 人のスタッフに従って軽く体を動かした後、うちわで紙ボール回し、足で輪回し、ゴルフボールで足裏マッサージ、お手玉積みをしている。スタッフは積極的に利用者に話しかけながら見ている。その間に入浴している人もいるので利用者は途中で入れ替わったりしている。

８）おやつ

レクリエーションが終わると、スタッフは机と椅子を元に戻しておやつの準備をする。準備ができると利用者はそれぞれ食べ始める。スタッフは利用者の様子を見ながら話しかけたりしている。

９）送迎（送り）

スタッフは「帰りましょう」と呼びかけて 3 人で分担して順番に利用者を送迎する。スタッフは順番に利用者を玄関に誘導し、玄関に大きな段差があるため介助し、車に乗せている。他の利用者はその間くつろいで待っている。

５．場面転換の様子について

行動パターンを見ていくと、体操、昼食、午睡、レクレーション、おやつのときにスタッフが机の移動をしていることが分かる。そこで、それぞれの場面転換の中で代表的な体操、昼食の場面転換の様子を図 7、8 に示す。

体操時スタッフは機能訓練室１に座っている利用者を立たせて、ソファや移動させたいすに座ってもらい、机を端に寄せている。レクレーションのときも同じ動作で行っている。机移動には時間はかからないが、利用者に席を移動してもらう必要があるため、5 分程度時間を要している。

昼食時にはスタッフは機能訓練室 3、4 の部屋からそれぞれ机を運んでくる。机は 2 人がかりで運んでいる。最初、机は離した状態で置いていく。スタッフは席順を話し合いながら決め机をくっつけていすを置いていくが、利用者によって座るいすの種類が決まっているため、別

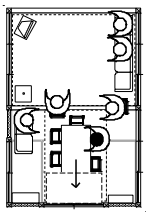

図７　体操時の机移動

写真２　体操時の机配置

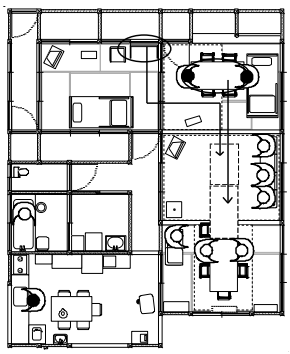

図８　昼食時の机移動

写真３　昼食時の机配置

図７　非日常プログラム

の利用者がその席に座っている場合には席を移動してもらっている。机移動には 5 分程かかるが、利用者に席を移動してもらう必要があるため、利用者が座り終えるまでには 10 分程度時間を要している。

６．非日常プログラム

12 月 9 日には、利用者はおやつに食べるホットケーキ作りをしている。4 人の利用者がホットケーキ作りに参加し、スタッフと一緒にホットプレートで焼いている。他の利用者はソファに座ってくつろいでいる。

また、12 月 11 日には 15 時からえんがわへ 7 人の見学者が来て 1 人のスタッフが案内している。そのうちの 2 人は田中さん家のスタッフで、機能訓練室 3 からレクリエーションの様子を見ている。利用者はいつも通りのプログラムで過ごしている。

７．まとめ

本報では伝統民家を再生した小規模福祉施設を対象に、改修後の施設の空間構成と使われ方の特徴について検討した。得られた知見は以下の通りである。

１）冬は特に暖房効率を上げるため、使う部屋数を少なくし、利用者は 1 日を同じ部屋で過ごしている。そのため、スタッフは昼食や体操、おやつの時間になると、机と椅子の移動が必要になる。利用者はその間ソファや移動させた椅子によけてもらう必要があり、結果的に利用者も移動しなければならなくなっている。4 つの和室が全てつながっており、部屋を使い分けにくいことや、冷暖房も機能訓練室１にしかないため機能訓練室 3，4 の部屋は温度調節が難しいことが考えられる。そのため、全てのプログラムを同じ部屋で行うことになり、プログラムに応じて机や椅子の移動が必要になっているのは課題である。

２）同じ地域の民家を利用しているため、利用者は家にいる感覚で過ごすことができる。スタッフは「ゆっくり過ごしてくださいね」と声をかけ、プログラム以外は利用者が自発的に行動できるようにしていることは評価できる。

３）古い民家を利用していることもあり、部屋と部屋の間に段差が生じている。特に玄関の段差が大きく、スタッフは 1 人ずつ利用者を介助して車と玄関を往復する姿が見られる。また、機能訓練室 1 と台所の間も段差が大きいため、台所側のトイレに行くときには段差を越えなければならない。浴室についても既存のものをそのまま使用しているため、段差が大きく、スタッフがほとんど介助している。利用者が移動するときにはスタッフが付く必要がある場合が多く、利用者が 1 人での移動が難しくなっている点は課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、「えんがわ」スタッフの方々、利用者の方々には、度重なる調査にご協力いただいた。また調査には千原真理･森川瑞季両氏(卒論生)の協力を得た。末尾ながら記して謝意を表します。

* 山口大学工学部感性デザイン工学科　学部生
** 山口大学大学院理工学研究科　教授・工博
*** 山口大学大学院理工学研究科　助教・博士（工学）

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.
** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng
*** Assistant Professors, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.